ゲキブの亡霊

小松牧江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲキブの亡霊

【Ｎコード】
Ｎ９７８３Ｒ

【作者名】
小松牧江

【あらすじ】
和田さゆりが父親と一緒に火事で死んだ。高校入試を間近に控えたゆりか達は、参列する時間も惜しかった。しかし一件の電話が、ゆりかの受験勉強を妨げることになる。「私のお葬式、楽しかった？」

シーン01　電話1

彼は、自分の行動、すなわち電話を無視しなかったことに対して、自分が後悔したかどうか分からずにいた。彼女は四年前と変わらない調子で、今日の気候についての所感から入り、昨日放送されたゴールデンタイムの番組の概要、彼女のひいきする邦楽歌手の新曲リリース状況などを語った。いかなる内容であっても、聞き手のご機嫌を伺いながら常時疑問符をつけるような口調は相変わらずだったが、じれったさに負けて途中で口を挟むと、会話はあっさりと中断し、再開するまでに余計に時間を要することを彼は知っていたので、彼女との会話において必要なあいづちを過不足なく挿入し続けた。そして彼は、彼女が暇つぶしの目的以外で電話をしてきたことも分かっていた。彼女は、世間話と呼ぶことさえはばかられる無意味な会話を続けながら待っているのだ。彼が、彼女の会話を中断することなく且つ彼女が言葉につまらないタイミングで「なにかあった？」と質問することを期待しているのだ。

彼がそのようにすると、彼女は“私が聞いてとお願いしたんじゃなくて、彼がしてきた質問に答える”ため、突如として冗舌になった。

「うん。まず私、今中三なんだけど。…あ、知ってた？　ありがとう覚えててくれて。私のことなんか忘れちゃったかと思って、だから最初から説明したほうがいいかなあなんて考えたんだけど自己紹介は省略してよさそうだね。えっと、じゃあどこからにしよう。そうそう、私もうすぐ中学卒業できるんだよ。…当たり前って？　えへへ、でもでも世間でいわゆる当たり前のことって、私には必ずしも当てはまらないんだよね。だって私、ふつうじゃあないんだよ。なにせ、今年一回も学校行ってないんだからね。…うん、そうだよ。もちろん原因があって結果があるんだよ。だって、ひどいんだよ。知ってる？　クラスが仲良くうまくまとまるためにはどうすればい

いか。わかる？　…わかんない？　えへへ、教えてあげる。誰か一人を集中攻撃すればいいんだよ。そうすればその誰か以外、もちろん先生も含めて、仲良くなれるんだ。グループを作ってから敵味方にわかれるより、よっぽど効率がいいんだ。もうわかった？　…そうだよ、まさかだよ。その“誰か”が私なんだよ。決して楽ではなかったよ。いろいろ考えて、最初はなんで私がこんな目に遭わなきゃいけないのって思った。なんで私、何も悪いことしてないのにって思った。でも私がキレても他の誰かが“誰か”になるだけだから私が頑張らなきゃって思った。でも我慢しきれなかった。あいつらだけは許せないって思った」

ここで、水たまりに浮いた枯葉のような近況報告が一時停止した。彼女の息づかいが若干荒いでいるのがわかった。言いたいことだけ言えば興奮もするだろうし、ひきこもりしていれば話すだけで息切れする体になってしまうだろうことも想像できた。そして、彼女が昔のままであることをほぼ確信した。次に期待されている相槌は「あいつら？」だということは思案するまでもなかった。

彼が彼女の期待に応えると、彼女は彼の質問に答えた。

「あいつら四人は、ほんとにひどいんだよ。クラスのほかの人たちがいいとは言わないけど、ほかの人たちは影でこそこそ私を悪くするだけだけど、あいつら四人はそれだけじゃ飽き足らず直接的に私を追い込んだ。私は何で？　って思った。でも私がキレたら、私じゃない誰かが“誰か”になる。そんなのかわいそうだから、私は頑張ろうって思った。でも、でも頑張りきれなかった。だって、あいつらは、だって、だって、あいつらは」

語尾が嗚咽に変わっていったが、そのさまは喩えでなく、小さな子どもが駄駄をこねくり回しているようだろうと推測できた。以前同小の女子に会ったとき、あまりの脱皮ぶりに自分が変わっていないことに不安を覚えたものだが、彼女の場合、逆に発達障害を疑う程そのままだったので、彼は当時の彼女に対して言った。

「そんな辛いことを無理して言葉にしなくてもいいんだ。よく頑張

ったと思うよ」
「うん、でもね。私ももうすぐ高校生になるんだよ」
あまりにも自由な話題転換だったが、彼はくらいついた。
「私、強くなりたい。高校生になる前に強くならないと、また同じ目に遭っちゃうから、今月か、来月までには強くなりたい。職業がハンターのときはＤＥＸ９９だけど、学生のときも強くなりたいの」
彼は、この電話が強い敵を倒して多くの経験値を得たいけどレベル低いから協力してねという趣旨であることを理解した。彼女に質問し、敵の情報をできるだけ入手した。敵は四人で、名前、所属学年クラス、部活動、登下校のメンバー、住所などを彼女は知っていた。成績や希望進路などもおおまかに聞いた。学校に行ってなくても、たいていのことはケイタイでつぶやくので分かるらしい。大きかったのは彼女が敵の写真を持っていたことだ。入学式で撮影した集合写真だが、敵の外見がわかるのは有利だ。これらの情報と彼女のお願いごとをそしゃくしながら、彼は掛け時計を見ると、十時半ちょうどだった。まだ慌てるような時間ではない。しかし、彼女と同じ職業である彼には、彼女の希望を楽にかなえるアイデアはすぐには浮かびそうにない。一人ならともかく、敵が四人というのが大きなネックだった。一人ずつ仕留めることはできるとしても、二人目、三人目ともなると敵以外の警戒・監視が厳しくなるのは明白だ。潜伏場所も確保しなければならないだろう。それ以前に彼女が容疑をかけられれば、実質狩り続行不可能だ。少なくとも三人目までは、容疑をかけられないようにしたい。彼は、そこが今回のお願いのポイントであると考えた。
電話はずっとつながっていた。ひざを抱えて彼の出すアイデアをじっと待っている彼女の姿が浮かんだ。彼は、その姿を想像しながら彼女の名を呼んだ。「うん」と聞こえたので、
「まず、死んでみようか」
と提案した。

シーン02　一人目（1）

一時間目は始まっていたが、三年C組の教室は生徒だけだった。職員会議が長引いているらしい。今が三学期でなければ、男子はデュエルか狩りに興じ、ゆりかも周りと雑誌の回し読みでもしていたことだろう。しかし、今はほとんどの生徒が問題集を睨め付け、入学試験の成功率を上げていた。

静かな教室に響いた扉を引く音は、いつもよりみんなの興味を引いた。入ってきた担任は、神妙な顔つきを造り、歩幅も狭くしていた。担任が教壇の前で停止するころには、みんな自習を中断していた。ゆりかは、教師としては少数派の具体的ではっきりとした物言いが持ち味の担任が好きだった。しかし担任は歯切れ悪く咳払いをしながら、

「それでは、ただいまより、和田さゆりさんご一家のお葬式会場へと向かいます。みなさん、私たち三年C組のかけがえのない仲間であった、和田さんに最後の別れをしましょう」

と言った。今日は多数派の話し方だと思った。こちらではなく、大人のマナー審査委員会に向けてスピーチしているような答弁だった。担任はもう二、三言なにか言い、それからゆりか達生徒をマイクロバスにつめこんだ。バスは一台だけ用意されていた。いつもならきちんと出席番号順に並ばせようとする担任は、だらだらとバスに乗り込む生徒たちを黙って見ていた。バスが発進してからも一番前に座り、生徒を見張ろうともしなかったので、ゆりかはメール着信が来たケイタイを安心して開けることができた。陸からだった。

『今日、空子にサプライズ仕掛けるぞ。あそこ予約しとくから』ゆりかは、返信する代わりに、通路を隔てて真横に座っている陸に、空子の推薦入試の結果発表が今日だとはもちろん知ってるけど、合否がまだわからないでしょ。もちろん合格してるって信じてるけど…という意味の目配せをした。すると、ゆりかのケイタイがまた振

動した。陸からだった。『いやいや、ゆりかさん。隣の空子女史を見てくださいよ。今年一番のいい笑顔ですぜ』ゆりかはメールの指示どおり、隣の小さな同級生を見た。足をぱたぱたと動かし、まるで遠足へ行く小学生のように、窓から見える見慣れた近所の風景を楽しんでいた。ゆりかの視線に気づいた空子は、今年一番いい笑顔をしていた。それはすぐにゆりかに伝染し、さらに通路を隔てて陸、ついにはその隣でのんびりしていた羽実にまで及んだ。バスが葬儀場に着くまで、四人はずっと笑っていた。

帰りも同じバスで校門をくぐった。ゆりかは、学校へ戻るときはお清めの塩はいらないのかなと少し思ったが、さして気にもならなかった。顔色が悪いままの担任に先導されて教室に戻ったが、お昼近くになってしまっていたので午前中はずっと自習ということになった。みんな、一時間目の続きであるかのように自然に自主勉強を再開した。給食の時間も掃除中も、三年C組の生徒たちは受験を控えた中学三年生だった。今日の非日常に触れる者は一人としていなかった。

放課後、三人は打ち合わせどおりに動いた。陸が空子の右手を、ゆりかが左手を捕まえ、羽実が「犯人、確保しました」と笑った。足をぱたぱたさせる空子をいつものカラオケボックスまで運んだ。今日もぎりぎり昼間料金で入店できた。事あるごとにここで騒ぐので、店員のお兄さんともすっかり顔なじみになっている。お菓子や飲み物もあらかじめ用意してもらっておいた。

「空子ー！　合格おめでとー」

三人でひとつのマイクに向かって思いっきり叫んだ。狭い室内が祝辞で埋め尽くされた。それを受けた本人はぽかんとしていた。

「えっと、みんな、知ってたの？　ていうかこんなことしてていいの？　受験べん…」

「ヤボなこと言うのはその口かあ！」

つまらないことを口走った空子にゆりかは飛びつき、健康的な頬を引っ張った。手足をぱたぱたさせて抵抗する空子は、まだ何か吹

っ切れない表情だったので、ゆりかは胸のよこをくすぐった。空子がそこに弱いことは知っている。
「きゃっ。ゆりちゃん、そこ、ダメ…」
空子をくすぐりながら、ゆりかは今更ながら彼女の頑張りに感極まってきた。この小さな体で、県外のバレーボール強豪高に合格したのだ。ゆりかは小さな体に抱きついた。
「空子、おめでとう」
「えっとね、ごめんね、ゆりちゃん」
空子が抱き返してきたのが分かった。ゆりかは涙腺が緩むのを必死に耐えた。この中で、いやクラス中で空子ほどの頑張り屋はいなかった。そのまま抱き合っていると、陸の元気な声が響いた。片手にマイクを持っていた。
「よっしゃあ。空子が改めてゆりに調教されたところで、先発いきまーす」
「おー！　何系から？」
「やっぱ、卒業系からでしょ」
それは時期尚早な気もしたが、どうだ私のセンスはと言わんばかりに胸を張る陸を止めることはできなかった。軽快にタッチパネルを操作する陸に、羽実が尋ねる。
「やっぱり、〇月９日？」
「ばっか、卒業って言ったら尾〇だろ」
いつものように盛り上がった。空子も元気にはしゃいでいた。
一通り騒いで外へ出ると、当然のように街灯が灯っていた。夏ならばまだ明るいだろう。現在地から自宅までの方角で二組に別れ、ゆりかは空子と寄り添って寒天の下を歩いた。今日は学校でもあまり勉強できなかったから、夜は遅めまでやろうとぼんやり考える。
「ゆりちゃん、今日はごめんね」
手袋ごしにも空子の“ごめんね”が伝わってきた。ゆりかは口癖のような謝罪が好きではなかったが、それが彼女の処世術であると感じてからは含めてかわいいと思うようになっていた。目を潤ませ

て見上げてくる彼女を直視できず、ゆりかは空いた手で頭を撫でることで誤魔化した。
「バカ、みんなで決めたでしょ。第一志望の結果発表は、四人揃ってするって。私が受かったときは、もっと盛大に祝ってもらうからね」
「うん、ごめんね。ゆりちゃんなら絶対大丈夫だよ」
そう言った空子の顔は、ゆりかからは見えないが、きっと合格を信じて疑わないといった風に笑っているのだろう。ゆりかは、つないだ手を強くした。
ゆりかの自宅前で名残惜しく手を放し、バレー部のエースとは思えない小さな後ろ姿を見送った。空子は一度足を止め、顔を横に向けた。しかしすぐ前に戻り、再びゆりかから離れていった。きっと何か言おうとして、でも恥ずかしくて止めたのだろう。その様があまりにもかわいくて、ひとりにやついた。
空子が完全に視界から消えた後、自宅のガレージを見てパパがまだ帰宅していないことを確認した。財布に入れてある鍵で玄関を開けて「ただいま」とつぶやいて二階へ上がった。ゆりかが長年続けている一連の動作だった。着替えを済ませ、すぐに二人分の夕食の支度にかかる。帰りが遅く必要ない日も多いが、必要なときに用意してあるとパパが喜ぶので毎日そうしていた。
ちょうどからし味噌の濃さを調節し終わったころ、いつものエンジン音が耳に入ったので、ゆりかはエプロンをつけたまま玄関に駆ける。今日は、比較的早いほうだ。
「パパ、お帰りなさい」
一流料亭の若女将にも負けない笑顔でそう言って、ゆりかは歴戦のビジネスバッグを受け取った。パパは「ただいま」と、優しく笑った。
パパがスーツを脱いでいる間、おでんを温め直し、リビングに戻ってくる時間を見計らってテーブルに出した。ゆりかは自分の箸はあまり進めず、鍋をつつくパパの動きを追っていた。ダシは薄めに

してからし味噌で後付けするスタイルを取ってみたので、是非評価を聞きたかったのだ。それに気づいたのか、パパは笑った。
「おいしいよ、ゆりちゃん。こんなにおいしいんだ、早く食べないとパパが片付けてしまうぞ」
「わっ、ひどいよパパ」
期待通りの言葉にほっとして、ゆりかは慌てるようにして食事を進めた。
キッチンをすっかり片付けた後、経済新聞を読んでいるパパにコーヒーを出したら、後は受験勉強にかかるだけだった。コーヒーメーカーからカップに移し変え終えたタイミングで、家電が鳴り響いた。マンション経営や投資の勧誘にしては時間が遅い。こんな時間に鳴る家電に、ゆりかは心当りがあった。仲間内で唯一ケイタイを持っていない空子だ。そうあたりをつけたので、今日の延長で「もしもし」の声が少し浮かれ気味になった。それが間違いだったことはすぐにわかった。会話が始まるまでのタイミング、かすかに聞こえる息づかいは、明らかに空子以外の人間であった。自分のした勘違いも含めて、気分はよくなかった。空子でなければ、ゆりかにとってプラスになる電話である可能性はほとんどない。その不利益な電話は、ゆりかの知らない声で言った。
「私のお葬式、楽しかった?」
学年トップクラスの成績を誇るゆりかだったが、その問い対しては何も答えられなかった。受話器を握って呆けている間、台所に残されたコーヒーは着実に熱を失っていた。

シーン03　一人目（2）

指を鳴らすだけで一国を焼け野原に変えられる支配者も、その日の気分で人を首吊りに追い込める資産家も、時の流れだけは自由にできないらしい。会社役員の娘に過ぎないゆりかには、時間以外にも自由にできないことが多くあった。

今朝もゆりかは、五分と遅れることなく目を覚まし、日常にとりかかった。白い息を吐きちらしながらボーダー柄のチュニックにジーンズを合わせ、姿見で確認する。制服を着るのは一通り朝の仕事を終えた後なのだ。リビングキッチンにて黒ネコ柄のエプロンを装着し、暖房を入れる。二部の朝刊の内、経済新聞でない方をテーブルの上に置いておく。ぴったり小さじ四杯のコーヒーと二〇〇ｃｃの水をコーヒーメーカーにセットする。昨日アイロンがけしたスーツに合ったネクタイを選んでおく。五枚切りの食パンによく混ぜた納豆をのせ、トースターに入れておく。そろそろかなと思いながら、ブロッコリーをスライスしていると、リビングの戸が開くのが聞こえた。手を止めてすかさず振り向き、今日一番の笑顔で「パパ、おはよう」と言った。パパは少し照れたように、ああ、おはようと言うはずだった。そういう手順になっているはずだった。

しかし、事はそのようには進まなかった。しわひとつないスーツを身に着けた男性は、照れたようなあいさつの代わりに、黙って接近してきた。すぐにゆりかは、今朝の自分が間違っていることに気づいた。それだけで全身の力が抜けていき、砂城が崩れるように両膝を床に打ち付けた。意識ははっきりしていて、自分の顔がひきつって半笑いみたいになっていることも、涙どころか尿まで垂れ流れていることもわかったが、それをどうこうする気は起きなかった。パパは娘の放尿など気にすることなく、ゆりかが洗濯してたたんでおいた靴下を履いた足を突き上げ、ゆりかの腹部をえぐった。小さくうめき、膝の代わりに背中と尻をキッチンの床にあずけたゆりか

は、服従の証として腹を丸出しにする犬と似た体勢になった。
「ひひっ…」
と洩らしたその顔に、パパの足が勢いよく振り下ろされた。ゆりかはのたうちまわりながら両手で口を塞いだ。自分の血が、てのひらにまとわりつくのがわかった。泣き叫んで激痛を少しでも和らげたかったが、それをするとさらに大きな痛みがやってくることを体が覚えていた。歯はどうやら折れてはいないようだった。汚物を見るような目をしたパパが背を向けたことを確認すると、蟲のように這いつくばって逃げた。力をなんとか少しだけ呼び戻し、キッチンに手をついてよろよろと立ち上がると、トースターとサラダをゴミ箱に放った。コーヒーもドリップごと洗い場に流した。ゆりかがこの場にいた痕跡を消すためだった。作業を終えると、エプロン姿のままキッチンを抜け出して二階へ這い上がった。“今”は、パパは絶対に二階には来ない。それと同時に、ゆりかは一階に姿を現すことは許されない。なぜなら新しい恋人ができたばかりのパパには、１５歳の娘など存在するはずがないからだ。この家に女はいない。それが、“今”のルールだった。ベッドに倒れこもうとしたが、下半身が水に浸かったような感触に気づき、ふらふらと下着ごと部屋着に着替えた。
あらためてベッドに身を委ねる。腹部の痛みよりも自分が決められたルールも守れない悪い子であると思うと悲しくなった。外に声が漏れるのを防ぐため、枕に顔を押し付けて泣いた。ルールを破ったのは久しぶりだった。昨日の夜遅くに来たのだろう、今度の恋人はすごく静かな人だと思われた。今だって物音ひとつしない。そんなことを少し考えたが、傷の治療を体が求めているのだろう、ゆりかは朝から深い休息に入った。
目が覚めたのは放課後の時間だった。痛みがある程度和らいでいた代わり、少し体がけいれんした。最後に空子に触れてから２４時間近く経過していたので禁断症状かと思ったが、そうではなく陸からの着信でベッドに置いたケイタイが振動していたのだった。見る

と、午前中から何度も着信やメールが届いていた。無断欠席を心配してくれたのだろう。しかし、電話は別の用件だった。陸はひどく興奮していた。

「ゆり、死人から電話なんてかかってきてないよな？」

親友の第一声で腹部の痛みが引いた。ゆりかの冷静な部分が、今夜も勉強できないかもねとささやいた。

＊

空子の将来を祝福したあの日の電話は忘れることにしていた。第一志望の入試は来週に迫っており、よく意図のわからないイタズラ電話にかまけている余裕は無かった。しかし、それが空子を不安にさせる悪い電話であるなら、正面対決することに迷いはない。

翌朝、ぐっすり寝ているカップルを起こさないよう細心の注意を払い、そっと玄関を開けた。外はまだ夜と区別がつかない。針のような寒さを少しでも緩和するため、飛んだり跳ねたりの準備運動をしながら玄関先で待ち伏せる。空子と確実に出会う方法だった。三年間、空子は早朝の走りこみを一日だって止めていない。進路を決めた翌朝だって、小さい体がさっそうとウチの前を駆け抜けたことだろう。今日も、もちろん例外ではなかった。坂の向こうから、ゆりかと同じジャージ姿が見える。この時間は短期的に見ると、おじいさんの散歩の時間くらい正確なのだが、三年前と比較すると飛躍的に早くなっている。空子が成長した分、待ち伏せするゆりかも早起きになるのだ。それもゆりかにとって幸せだった。

「ゆりちゃん！」

ゆりかに気づくや否やトレーニングのペースをあっさりと乱し、跳ねるように飛びついてきた。ゆりかが朝から待ち伏せているときは、基本明るくない話が待っていることを承知しているからだった。

手をつないでひととおり回転などした後、並んで走り出した。ルートは空子の日課どおり、丘の上に造られた住宅街を外周する道を

進んだ。落下防止のガードレール越しに、駅前のオフィス街が一望できる。パパに扶養してもらっているからという理由以外、何一つゆりかを引き止める要素がないこの街で、唯一好きな場所だった。街に下りるには遠回りになる為、自動車も自転車もほとんど通らない。どちらからとなく足を停め、ガードレールに近づいた。ここからの景色を空子と眺めるのはあと幾度もないだろう。

今日の主題とは関係ないことでしんみりしていると、それが伝染したように空子もうつむいた。ゆりかは慌てて本題に入った。

「空子、昨日私がいないとき、へんな男子がへんなこと言ってきたんでしょ」

「うん…。昨日ね、ゆりちゃんお休みだったから、陸ちゃんと羽実ちゃんと三人で帰ったの。ゆりちゃんが全然電話に出ないって言うから、すごく心配だったの。そうやってゆりちゃんの話しをしながら歩いていると、正門で私たちをにらむようにして立ってた人が私たちに近づいてきたの。死んだ人から電話があった人いるかって、聞いてきたよ。私は意味がわからなかった。陸ちゃんが、その人に意味わかりませんけどって言ったら、その人は羽実ちゃんのほうを向いて、同じ質問をしたの。羽実ちゃんは、ありませんって冷静に言ったの。そしたらその人、私に向かって同じ質問をしたの」

うつむいたまま丁寧に説明した空子を見て、状況を説明させるような導入をした自分を悔いた。その上で、ゆりかは正しく事実確認をする。根拠もなく、心配しなくていいよなんて言う程度の関係ではないつもりだった。

「その男が言う“死んだ人からの電話”ってやつ、私にあったのよ」

空子は少しだけ顔をひきつらせた。ゆりかは、電話の内容を正しく伝えた。最初空子からの電話だと思って浮かれた声になったことだけは省いた。空子は、ゆりかと下界の景色を見比べていた。ゆりかは、ちょっと状況を整理するねと前置きした。

「本人って可能性はありえないでしょ。たしかに女の声だったけど。

一年のあのとき以来、全然しゃべってないからどんな声だったか覚えてないし。大体、お葬式まで済ませた人から電話が来るなんて、イタズラ以外考えられないでしょ。新聞でもテレビでも言ってた。黒こげで顔は親族でもわからなかったけど、警察は事件性も疑って、解剖とかしたって」

我ながら全然整理できてないなと思った。空子は、一緒に寝てよお姉ちゃんとおねだりする子どものように、不安げにゆりかを見上げていた。抱きしめたいのを我慢しながら、若干話題をずらした。

「そういえばさ、その男子って、どんな感じの人だったの」

ゆりかがそういう話題をふったからか、空子は目を丸くした。空子の答えは、陸からの情報とほぼ一致した。むしろ、制服のデザインと身に着けていたバッジの色から、学校と学年まで割り出した陸のほうが詳しかった。男の第一印象に関して、陸がガキっぽいモコミチと評したのに対し、いつもは優しそうな人と言ったのは相違点だった。話すうちに怖かったことを思い出してしまったのだろう、空子の表情はますます不安度が上がっていた。肩が震えているのがわかった。

「ゆりちゃん、亡霊って電話とかできるのかな。やっぱりあのとき」

「ばかっ」

震えた声でばかなことを言い出したので、それを自覚させるためにそう叫んだ。その勢いに乗って、両腕で親友を抱き寄せた。身長差の結果、胸に親友の顔をうずくまらせる形になった。

「すぐそうやって、自分が悪いみたいなこと言うんだから。心配しなくていいの。空子は、私が守るから」

言葉にも腕にもぎゅっと力をこめた。こうするために、朝早く待ち伏せしたのだ。胸の中で体をよじらせて何か言っていたが、無視して抱きしめ続けると、やがて全身をあずけてきた。軽かった。この小さな体で、たくさんの弟妹を守ってきた。最近、調停もなんとかまとまって、お母さんも元気を取り戻して、そして空子も夢に近づくことができた。くだらないことで空子の今にも未来にも傷つけ

させないつもりだ。改めて決心して体を離すと、自由になった空子が言葉を繋いだ。

「ゆりちゃん、ごめんね」

そう言ってかよわく笑う空子は、背景の田舎町の景色など比較にならない価値を持っていた。

シーン０４　一人目（３）

別れ際の空子に「また、学校でね」と言われたが、ゆりかは今日もそのつもりはなかった。男を追いかけるという、人生初の体験をするためだった。男は名乗ったらしいが、空子が苗字を、陸が名前を覚えていていたので、フルネームは知ることができた。それと盟帝学園の制服を着ていたことが、男の手がかりのすべてだった。

第一志望校ということで下見に行ったことがある為、現地まで迷うことはなかった。私鉄、ＪＲ、さらに市内バスを乗り継ぎ、“盟帝学園前”と名づけられたバス停で下車すると、家を出てから二時間近く経過していた。実際通うとなると駅からは自転車が早いかな、などと考えた。男がどの門から出てくるかわからないので、ゆりかは下校の時間を待たず、正門から堂々と侵入する作戦をとった。案の定、男子の体育だろうハンドボールの審判をしていた赤茶色のジャージ姿のおっさんがゆりかに接近してきた。世の中のおっさんから排出される汚臭がマシになる季節だが、ゆりかがマフラーで口元を隠す理由としては充分だった。春先ならば、目と鼻も覆いたいところだった。

「受験会場の下見にきました。一度来たことあるんですけど、その、直前で心配になって」

用意していた台詞はそれなりに功を奏し、ジャージのおっさんは自分の生徒をほったらかして入学希望者を快く案内した。そこそこどうでもいい学園の理念や校風を語られながら、創立者のブロンズ像の前で変なポーズをとられたりした。ゆりかが話しの隙を見て、以前来た時に案内してくれた人にあいさつしたいと言って名前を告げると、放送で呼び出すと言ってくれた。生徒指導室にゆりかを案内し、ここで待つように告げると、ジャージは出て行った。ゆりかはそのドアに向かって、とりあえず携帯用ファ〇リーズを吹き付けた。

ゆりかの訪問に緊急性を感じなかったのだろう。終業を意味すると思われるチャイムの後、ようやく放送で男の名が呼ばれるのが聞こえた。やがて現れた男の第一印象は、事前に陸から知らされていた情報に近かった。顔立ちはよく、背も高いが、なんというか魅力を感じない。よくわからないが、お見合い写真向けの外見かもと思った。持っていた手さげかばんを長机に置き、ゆりかと向かいあった。

「どうも、長瀬ゆりかさんでいいですか」

「はあ、長瀬です。ワクイヒデヒロさんですか」

「はい、和久井秀洋と申します。よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

ゆりかが会釈すると、相手はぷっと吹き出した。

「ごめん、なんか英会話の例文っぽかったね、俺ら」

和久井は、長机の前に置かれたパイプ椅子に座り、机をはさんで立っているゆりかにもそれを勧めた。ゆりかが勧めに従うと、視線を合わせ、

「電話の主は、生きてると思う」

と言った。いきなり本題だったが、それはゆりかも望むところだった。生きている。そのほうが納得しやすい。空子が言うような“亡霊”をあっさりと肯定するつもりはない。しかし、知り合ってから数分では和久井が電波男かどうかわからなかったので、

「でも警察は司法解剖して、本人だと断定してますよね」

と一般的な否定材料を提示してみた。和久井はその問いは予測済だというようにうなずき、

「もちろん、俺もそうニュースで聞いてる。ただ長瀬さん、その情報について民放か新聞かネットニュースか、どれでもいいけどはっきりと覚えてる？」

ゆりかの返事を待たず、かばんからＫＯＫ○ＹＯのノートを取り出し、ゆりかの前に広げて見せた。ゆりかはプリントアウトされたブラウザのページがノートにはりつけてあるのを初めて見た。Ｂ４

サイズに収まるよう、ご丁寧にフォントも縮小されていた。ゆりかは和久井の意図を認識し、ネットニュースの切り抜きを目で追った。

『A市B団地、元自営業の男性（46）宅で発生した火災で、焼け跡から見つかった2遺体の死因は、男性は出血性ショック死、男性の娘（15）と見られる女性は、焼死であることがわかった。遺体が発見された部屋からは着火器具が発見され、また遺体から油分が検出されたことから、警察は無理心中の可能性があるとみて調べている』

ゆりかがつとめて意識しないようにしていた事件の初期段階のニュースだった。

「で、これが翌日の記事」

和久井はそう言ってノートをめくった。ゆりかは黙って目を走らせた。

『A市B団地で、元自営業の和田卓真さん（46）方で火災が発生し、男女二人の遺体が発見された事件で、親族とのDNA鑑定から、男性の遺体を和田さんであると断定した。和田さんは、首・腹部を刃物で刺されたことによる傷の起因した出血性ショック死、娘のさゆりさん（15）は、火傷による焼死であると断定されている。さゆりさんにも背部に刃物による傷があり、また遺体からは油分が検出された。現場には争ったあとがわずかにあることから、警察では無理心中の可能性が高いとして調査を続けている』

ゆりかが興味を示さないようにしていたニュースの続報だった。

「ワイドショーや匿名掲示板ではそこそこ盛り上がってたみたいだけど、父親の工場が閉鎖して借金がすごいことになってたとか、娘が一年以上登校拒否だったとか、そういうのは置いといて、この記事で気になることはない？」

なるほど解答があるという目で読むと、野次馬気分で読むときとは少し違った目線になるのかもしれない。ゆりかはもう一度、現国を解くときの視点で記事を見た。そして、和久井の問いに対して正解と思われる箇所を指さした。

「この文章だけだと、男性のほうしかＤＮＡ鑑定してないって読めるかもしれない、です」
　和久井はゆりかの解答に満足したようにうなずき、
「やるね、長瀬さん。ウチも受かるかもね。実際、コストやマンパワー不足を理由に“ほぼ断定”できる場合は、解剖や化学調査を最小限にしてしまうことはよくあるらしいよ」
　と補足し、ＫＯＫ〇ＹＯノートを片付けた。ゆりかは、男が日本語の通じる人種であると判断し、話しが進む前に最も基本的な質問を試みた。
「ちょっと、質問があるんですけど」
「うん、当然だよね。本人が生きているんだとしたら、焼死体の男性の娘（１５）は誰なんだって話しになる」
「いや、それもそうなんですけど。それ以前に」
　ゆりかは、一度和久井の顔を伺った。手持ちぶさたな両手をテーブルに乗せ、質問を受け付ける体制だった。
「それ以前に、あなたは何者なんですか？　なんで面識のない私たちにそんなことを言いにきたんですか？　わざわざ待ち伏せまでして。そもそも、なんでそういう電話があったことを知ってるんですか？」
　和久井はすぐに答えようとしなかった。ゆりかは警戒の為、パイプ椅子から腰を離し、出口を視認した。あそこに到達するには、男の後ろを通過する必要があった。
「きゃっ」
　と声が出た。ゆりかが目標とした引き戸のガラス部分に、黒い物体が見えたのだ。扉の前を生徒が通過しているわけではなく、明らかに戸に張りついていた。
「どうしたの？　目つきに似合わないかわいい声出して」
と失礼なことをのたまいながら和久井が振り返る。すると彼はゆりか以上に驚き、慌てた動作でスクラップノートを少しちぎり、数字を書きなぐってゆりかに近づいた。

「迎えがきたから、悪いけど行くわ。後でこれにワン切りよろしく」
急接近してきたのは小声で話すためということはわかったが、ゆりかは本能で後ろに飛びのいた。しかし和久井はゆりかに興味を示さず、さっさと出入り口の戸を引いた。そこから、盟帝学園の女子制服を着た子が見えた。おそらく空子よりも小さいその子は、無言で和久井に抱きついた。むしろ、足にしがみついた。隙間からちらりと見えたのは、りんかくも目も丸々とした、お土産に持って帰りたいタイプの高校生だった。小動物のようなかわいらしい目で睨みつけてきたので、ゆりかは表情をくずし、和久井にしがみついて廊下を進んでいくその姿を、片手を振って見送った。
よく分からない終わり方だったが、ゆりかは来年入学予定の校舎を出た。目的の男と話をした時間はわずかだったが、往復時間と校風のレクチャーを合わせて、帰りがかなり遅くなってしまった。自宅でパパと恋人に鉢合わせるのを避ける為、ゆりかは夕食を作るのを諦め、久しぶりにコンビニに寄ってお菓子とジュースを買い込んだ。おそるおそる自宅のガレージをのぞき、車がないのを確認してほっと胸をなでおろす。唯一の安全地帯である自室で落ち着くと、陸への報告を優先した。陸は、昨日の電話なんて忘れたようにいつもの調子だった。その軽さが、今のゆりかにはありがたかった。ポッ〇ーの袋を開けながら今日の夕食メニューを報告した。
「買いすぎた。“冬季限定”って文字は、なにか呪術がかかってるとしか思えないよ」
「それわかるなあ。あたしも冬場のきっつい向かい風が来ると、たとえ風呂あがりでも風に向かって走り出したくなるもんね」
「ごめん、全くわからない」
雑談もそこそこに、片手で夕食をつまみつつ本題に入った。聞き手はゆりかの報告に逐一驚き、そのたびに話を中断させたが、もっとも気になるのは、あの男自体のようだった。
「で、その和久井さん？　にもらったケイバンにワン切りはもうしたのかね」

「したよ。情報があるならすぐほしいからね」
「いいなあ。ゆりだけ、一足先に春の足音が見えてきましたよ」
春はあんたの頭の中でしょうが。大体、彼女と思われる小動物がくっついてたって。
結局、陸とは本題に関して有効な推定・推測はできなかった。羽実にも同じ内容の報告を行ったが、相手の連絡待ちしかないね、で終わってしまった。空子には、今朝と同じように明日一番に報告しようと決めていた。
結局その日は、男からの連絡はなかった。

シーン05　一人目（4）

ゆりかは、待ち合わせ場所とした改札口前に制服、すっぴん、黒染めという出で立ちで直立していた。空子と相談しようと家を出るよりも早い時間にあった、男からの電話での要請を受け入れたからだった。これで無断欠席は三日連続だ。しかし、空子を不安にさせている原因を除去する為の手がかりがあると言うなら、断る理由はなかった。やがて、待ち合わせ相手が改札を通るのが見えた。ほぼ初対面の相手に手を振るのも名前を呼ぶのもはばかられたので、その場で視線を送った。その横を、和久井はきょろきょろしながら通り過ぎようとした。イラついたので、それを呼び止める声もイラついたものになった。振り向いた男は一瞬ポカンとし、

「あ、ごめん、見違えたね」

などとぬけぬけと言った。

和久井の先導で、通勤・通学ラッシュにやや逆走する方面の電車に乗り換えた。オフィス街から離れるにつれ、急速に車内は空いていった。不機嫌をいつまでも表に出すのはガキだなと思ったゆりかは相方に着席を促し、今日の行き先とその根拠などの詳細を改めて尋ねた。和久井は、あっけらかんと小声で会話をはずませた。これまで一言も口をきかなかったのは、話の内容を周りに洩らさない為だったとしか思っていないようだった。話の途中で和久井が立ち上がると、ゆりかは黙って続いた。降車駅は市内ではあるが、オフィス街、繁華街からは距離のある住宅街だった。ゆりかは、しばらく車の排気ガスにまみれながら国道の歩道を歩いたが、常時男の二歩後ろを維持した。長年の習慣で身につけた、男に触れない為の技だった。当然会話しにくいが、男は歩行を継続しつつ半分振り向いて沈黙を破った。

「しかし金持ちのお嬢でも、人生に不満とか不安はあるものなんだね」

「金持ち？」
ゆりかが問い返したことをほっとしたように続けた。
「今からお邪魔するお宅らへんって、市内でも医者やら大企業の社長やらが好んで住む地区らしいよ。山の上で不便っぽいけど、こういう人たちは、お迎えの車とか来るのかね」
「でもそのお嬢がなんでわざわざ市内から田舎来て、庶民の女に殺されなきゃいけなかったんですかね」
「…推測でしかないけど、あいつのブログにこのお嬢らしき人の書き込みが続いた時期があったんだ。文章だけでは人間性なんてわからないから、ネット上で仲良くなったんじゃないかな。で、なんとか身元をわかりにくくした状態で家に招待して、身代わりに殺したってところかもしれない」
ゆりかは肯定も否定もできなかった。ゆりかはまだ見ていないが、和久井の一連の情報は、事件を追っている内にたまたま見つけたというブログが根拠になっているらしい。そこにゆりか達の名前も書いてあったと、和久井は言っていた。
「そういうのも含めて今日何かわかればいいけどね。せっかく来てもらったし」
ゆりかはスプレーで真っ黒になった自分の髪をいじった。真面目そうな女の子がいたほうが情報しやすいという、今思えば根拠の薄い理屈に屈した結果だった。空子の不安を取り除く手がかりを持つ現在唯一の人間だから黙って従ったが、そうでなければ開いた口に上履きでもねじりこんでやりたかった。前に向き直った和久井が少し歩を早めたので、それに続いた。
目的の住宅街に並ぶ家々はどれも個性的で、屋敷と呼ぶほうがしっくりくるものも多く見られた。昔から家計を任され、お金で苦労したことはないと同時に節約癖が体に染み付いているゆりかは、屋敷の中には甲冑やトラの毛皮が置いてある程度の想像しかできなかった。ゆりかの前を歩く男が、
「なんか、玄関が網膜認証だったり、室内プールがあったりしそう

だね」
とか言っていたので、少し安心した。
目的の屋敷は、西洋貴族の別荘といった風体だった。門から玄関までの距離は比較的短いが、門には蒼いバラが咲き乱れ、庭園灯が二つもそびえた広い庭にはひじかけ付きの椅子がゆりかごのように揺れていた。庶民二人は、顔を見合わせて苦笑した。和久井がインターホンを押してからしばらく経過したが、玄関が開く様子もインターホンが応答する様子も見られなかった。和久井が顔を近づけて、部屋が広すぎて今頃ダッシュしてるんだよとささやいてきた。ゆりかは無言で距離をとったが、そのネタには同意した。やがて静かにドアが開き、ストレスって何ですか？　といわんばかりのふくよかなおばさん、というよりおくさまが顔をのぞかせた。二人が慌てて会釈すると、
「あいちゃんのお友達？」
と泣きそうな声で口火を切ってくれた。すかさず和久井が一歩前へ出て、
「すみません。ぼくたち、愛花さんの友達の友達なんです。ぼくたちの友達も行方不明なんです」
と、相手の興味を引かせた。
おくさまは、外まで出てきて話を聞いてくれた。体型はともかく、顔はやつれて肌もあれほうだい、くまも放置状態だった。程度は違うが、ゆりかは最近の担任を思い出した。あの火事から、ちょうど二週間経過している。つまり和久井の予想どおりなら、この人の娘も最低二週間は行方不明ということだ。和久井は、自分たちは友達の行方を探していて、ネットで愛花さんと友達だったことを知り、何か手がかりはないかと話を聞きにきましたと説明した。おくさまはパソコンに疎いらしく、あいまいにうなずきながらも娘の話をしてくれた。ゆりかは自分もあいまいな部分が多かったので、ほとんど黙っていた。
話し半ばで予想できたが、おくさまは娘のネット関係はもちろん

リア友もほとんど把握していなかった。ただ分かったのは、斎木愛花さんは約一年前から高校に行かず、部屋に閉じこもっていたことだった。

「ほんとに突然だったの。それまでは演劇部で楽しそうに頑張っていたのに。何を聞いてもうるさいとしか答えてくれなくなってしまったの」

娘が何をしようが、どうなろうが、愛しているという想いは変わらないが、来年は三年生だし、このままじゃ出席日数も足りないし、気になって気になって、将来どうするのってつい口を挟んだのが、先月のことだそうだ。それ以降、食事に手をつけることもなくなり、部屋からいなくなったのに気づいたのが三週間前のことだと言った。その日のうちに警察へ届け、有力な情報には賞金もつけているそうだ。

「わたし、あの子のこと、何もわかってあげられなかった。いつだって、助けを求めていたのに、何もしてあげられなかったの。それどころか、あの子を傷つけるようなことを…。もっともっと、愛してあげられていたら、こんな、こんなことには…」

おくさまは両手で顔を覆い、泣き崩れてしまった。私が行方不明になったら賞金いくらかなと思いつつ空を見上げると、いつ降ってきてもおかしくない曇り空だった。ロンドンの空もこんな色なのかな、と関係ないことを思ってみた。自分の口から吐き出る息が、圧倒的に白かった。

むせび泣くおくさまをなんとか立ち上がらせて、和久井が締めのあいさつを言える体勢を作った。二人でお礼と別れのあいさつをすると、

「今日は、来てくれてありがとうね」

と、心からありがとうといった調子で見送られた。

「あいちゃんが帰ってきたら、うんとしかってやるわ。こんなにいいお友達に心配させて、悪い子だって。また、遊びにきてね。もう一人のお友達も連れてきてね」

涙を浮かべて手を振るおくさまを直視できず、二人は最後のおじぎをして逃げるように閑静な高級住宅街を抜け、自動車の排気ガスと騒音と人間にまみれた国道へ舞い戻った。どちらかが大きくため息を吐くと、他方にも感染した。並んでだらだらと進んだ。
「いいお母さんだったね」
「はい。いいお母さんでした」
「おう、兄ちゃん、学校さぼってデートかあ？　ちゃんと勉強せんと、甲斐性なしでももてるのは若いうちだけだぜぇ」
自由と引き換えに多くのものを失ったカンジのおじさんがなんか言ってきたが、二人は視線での反応すらしなかった。
どちらかが、横断歩道の手前で足を停めると、他方もそれに倣った。歩行者信号が変わるのをただ待った。
「俺ら、あいちゃんの友達扱いだったね」
「はい。あいちゃんの友達になってました」
「若きお二人がこれから進まれる道に、光がありますように。微力ながらお祈りさせていただきます」
笑顔のお面をつけたようなお兄さんが、二人の進路の前でお祈りを始めてきた。やがて歩行者信号が青色に光ったので、二人は障害物を避けて同じ道を進んだ。
「きっと、あいちゃんはいい子だったんだろうね」
「そう思います。いいお母さんの子どもは、いい子どもだと」
「「じゃあ、お母さんが悪いと子どもも悪いんだ」」
二人は目を合わせ合い、まただらだらと歩き出した。
たどり着いた駅の券売機で復路の切符を購入し、先に改札を通って待っている和久井に追いついた。
「降りたら昼飯食べようか。定期のおかげで交通費使ってないお兄さんがおごるよ」
「ほんとうですか。じゃあ、松〇屋の七階行きましょうよ。せっかく市内まできたんだから」
「いや、お兄さん基金はワンコイン制ですが」

「…マックでいいです」
昼食の打ち合わせを終え、並んでホームにつっ立っていると、ほどなくして電車の到着を知らせる構内アナウンスが聞こえてきた。遠くから、快速列車の振動が伝わってくる。タイミング悪く、ゆりかのかばんに入っているケイタイが振動した。後でかけ直すからと言って切ろうとしたが、陸はそうはさせないとばかりに叫んだ。
「すぐ戻ってきて！　学校、来てない、そらこ、空子が…見つかって…！」
ゆりかは悲鳴ともつかない友人の叫び声を洩らさず聞いた。自分がケイタイを持ったまま立ち尽くしたのか、ケイタイを落としてひざをついたのか、よくわからなかった。
次の快速上り列車は、九分後だった。

シーン06　電話2

一人だけなら、うまくいけば事故や快楽殺人の可能性もあるとして迷宮入りにできる可能性もある。空子は自転車によるひき逃げ事故と推定されていても、立て続けに同じ土地で同年代の女子が死亡する事態となれば、当然被害者の共通点を探される。確実に残りの人間にも警察の捜査は及ぶだろう。そうなれば、彼にまでたどり着くのは極めて容易なことだと思われた。それでは、わざわざ亡霊を作り出した意味がない。二人目をいかに順調にしとめるかが、今回の成否のキーかもしれない。

彼の悩みとは対照的に、彼女は浮かれていた。

「えへへ、すごいね。心理戦みたいな？　そういうのもいいよね。敵の行動パターンを把握して、下り坂で自転車を思いっきりぶつけて突き落とすにしても、空子は運動神経もいいし気づかれてかわされる恐れがある。だからあえて遠くからベルを鳴らし、気づかせる。そうすればターゲットはその自転車が、自分に気づいていることになるから、危険なものとは思わなくなり、道の端によるだけでランニングを続行する。そこへ突撃する。えへへ」

彼女は彼が言ったことを満足げに反芻した。興奮冷めやらぬ調子だった。

「あんなヤツ、生きていたって世の中とってデメリットのほうが大きいんだから。父親が玉入れ遊びが大好きで、そうとう貧乏アピールしてたけどそれって自業自得だもんね。…やっぱそうだよね。それなのにクラスの連中には一生懸命頑張ってるからってペットみたいに可愛がられてた。本性は、私の存在自体を疑問視してくるような冷酷女なのに」

彼は彼女の期待に応え、つらい過去を自ら打ち明けた彼女をねぎらった。すると彼女は彼にとって予想外の反応をした。

「ん、無理なんてしてないんだよ。それよりも」

今日は、積極的に話しをするようだ。そうならそうで、そう望む彼女がいいように対応するのは彼の努めだった。

「空子はさ、結局自分がなんで死ぬことになったのか、最後まで気づかないんだよね。自転車に跳ね飛ばされて、ガードレールの下へ転げ落ちれば少しは痛いとは思うけど、自分は最後まで不幸を背負って頑張る少女のつもりでいる。ひょっとしたら、地獄の底でもそう思ってるかも。それじゃダメなんだよ。次からはあいつらが、自分がいかに高慢で自己中で反道徳で害悪な人間であり、それが原因で粛清されるのだということを理解させてやりたい」

彼女は、私今いいこと言ったというふうに、えへへと笑った。復讐とは基本的に自己満足の自己主張だ。加害者、すなわち元被害者は自分の存在をめいっぱいアピールしたがる。結果として、捕まりやすい。

彼は彼女の控えめなドヤ顔を想像しながら、望みを実現する為にはどうすればよいか考えた。しかし、どう希望的に考えても近所での警戒体制がケタ違いに強化される警察、世間をかいくぐることは難しかった。

「だったら、受験で遠出したときを狙うのはどうだろうか」

「わっ、もう何か思いついたの？」

彼のつぶやきに、彼女は瞬時に反応した。それがすべての問題に対する解決策を内包していると信じて疑わないでいるようだった。それに若干のプレッシャーを感じながらも、彼は次の作戦を説明した。

「えへへ、次のブログの更新も楽しみだよ」

彼女は胸が躍りっぱなしですといった調子だった。彼は、彼女のテンションを維持するために頭をひねった。

シーン07　二人目（1）

強制的に連れて行かれた先日のお葬式とは違い、土曜にもかかわらずクラスメイトみんなが自主的に集まり、涙を流していた。こんな多くの仲間に悲しんでもらえて、空子ちゃんは幸せねと知らないおばさんに言われた。死んだときに何人集合かけたかがその人の価値を示していると言いたげで、あまり話をしたい相手ではなかった。

ゆりかは故人の一番の親友として遺影の前で号泣したり取り乱したりすることはしなかった。むしろ、そこそこ仲のよかったクラスメイトたちと同様に振舞っており、そういうことができる自分に驚いていた。だからせめて、最後までいるつもりでいた。

会場は近所だったのでみんなは儀式が終わるとめいめい帰宅を始めた。そのクラスメイトたちから、悲しみとは別の意識がほんのわずかまぎれているのを感じ取ってしまうのは避けられなかった。身近な仲間が死んでも、死と自分を結びつけることはできないようだった。ゆりかは親族席をちらちらと見ながら後ろ髪をひかれる想いだった。あのチビたちは、拠り所だったお姉ちゃんを失ってどうなっていくのだろう。父親らしき人は見えなかった。きっと今日も玉入れに夢中なのだろう。

会場を出てゆくクラスメイトたちの中に親友二人の姿を捉え、ゆりかは目を疑った。急いで追いつき、陸の肩をひっつかんだ。

「ちょっと、二人ともどうしたの」

「どうって、何が？」

陸は、ゆりかを振り払うように振り向いた。その目はゆりかを睨みつけるようにしていた。親友を失ったばかりとは思えない表情にゆりかは戸惑ったが、この後火葬場まで付き合わないのと疑問を提示した。ほかのクラスメイトならともかく、死んだのは誰でもない空子だ。せめて最後まで一緒にいてあげるのは当然でしょう。睨みつけるだけの陸に変わって、隣の羽実が答えた。

「私、明日東京で入試なの。早めに休んでいいコンディションにしとかなくちゃ」
そのものいいは、かまってちゃんを軽くあしらおうとするようだった。ゆりかはぞっとして、陸に向かった。
「じゃあ、陸は？　あんたの第一志望は来週でしょう」
陸は黙ったままで、答えたのはやはり羽実だった。
「陸はね、当面私と一緒にいるの。だから、一緒に帰るのよ」
「意味わからない。何でそういうカンジなの？　空子だよ？　他の誰でもないんだよ」
「まだシラを切って食い下がるの、ゆりちゃん。私たちが黙っているのが精一杯の優しさだって気づかないの？」
ゆりかは羽実の意図が全くつかめず、質問を繰り返した。今は、不利な生い立ちにも負けず高い志を持っていた親友と、最後のお別れまで一緒にいる以外の行動がありえないはずだった。
「そこまで言うならこっちの質問に答えて」
羽実はこれ以上付き合いきれないという調子で声を荒げた。
「ゆりちゃんあなた、空子が死んだ日、どこでなにしてたの？」
「それは…」
一言では解答できなかったのでどうまとめるか試案するため、ゆりかは即答を避けた。それが致命傷とでもいうように、羽実は笑った。
「ホラ、見て陸。あの子、答えに窮してるでしょ」
「うん。やっぱそうなんだ」
「何？　別にやましいことなんてないよ。学校休んで調査してたのよ」
「へえ、何を？　誰と？」
バカにするように羽実がつないだ。ゆりかは正直に答えるしかなかった。しかし、そうしても羽実の嘲笑は止まらなかった。
「男嫌いのゆりちゃんが、知らない男と二人でねえ。陸、どう思う？」

「何か、裏があるとしか思えない」
「羽実、あんたいい加減にしなさいよ。こんなときに何が言いたいわけ？」
「何？　私に全部言わせる気？　前からちょっと思ってたけど、気の利くふりして性格悪いわあなた」
　羽実はそう言いながら深呼吸した。
「推薦の子が見たって言ってたわ。あなたあの日朝早くから街に出てたそうじゃない。しかもオタクみたいな格好して。そしてお昼ごろ陸が空子が死んだことを連絡してから、あなたがこっちに戻ってくるまでに二時間以上かかっている」
「そうだよ。それはすごく後悔してる。まさか私の留守中にこんなことになるなんて思わなかった」
「ほんとに、思わなかった？」
　その声にぞっとして、ゆりかはまた返事を詰まらせた。それを見た羽実は、満足げに攻め立てた。
「ゆりちゃん、判ってたんでしょう。殺人鬼がこの街にいて、私たちを狙っていることを知ってたんでしょう。だから自分だけ、安全圏に避難した」
「そんなわけないでしょう！　私はただ、みんなを守ろうとして動いてただけよ！」
　ゆりかの渾身の主張にも、二人は顔を見合わせて笑っただけだった。
「じゃあさ、ゆり」
「なんで、それを私らに言わなかったの？」
　口を曲げて笑う親友たちを前に、ゆりかは、がっくりとうなだれた。そこへ羽実がとどめとばかりに加えた。
「あんたは男と逃げ隠れてればいいのよ。私らも二人で助け合うから」
　それだけ言い捨てて、親友二人が寄り添うように帰っていくのを黙って見送った。もう弁明とか引き止めるとかそういう気力を使う

行動はできなかった。
力なく会場に戻ったが、すっかり片付けられており、火葬場へ向かうバスも出発していた。空子との最後の別れも叶わず、ひとりとぼとぼと帰宅した。
土曜もパパは仕事の日が多く、ガレージに車はなかった。しかし玄関の中に入ると他人のパーソナルスペースを侵害したような感覚がした。パパの恋人がいるのだ。今の恋人は努めて姿を現さないようだが、かすかな気配が余計にゆりかを緊張させた。お昼だったが食欲が沸くはずもなかった。自室のカギをかけると、腰がくだけたように戸にもたれかかった。
三年前、入学式を明日に控え、買った制服を試着してひとりはしゃいでいた。あの時もタイミングが悪く、パパが当時の恋人を連れてきてワインを楽しんでいることに気づかなかったのだ。頭にグラスをぶつけられ、ワインで赤く染まったセーラー服のまま、ゆりかはとぼとぼと家出した。もう戻ってこないつもりだった。
団地はずれのお気に入りの場所へたどりつくと、街明かりを頼りにガードレールをのりこえた。今から真っ逆様に落ちるつもりのはずが、足をすべらさないように気をつけている自分がおかしくて、座り込んだ。お酒のいやな臭いがする制服をぎゅっとつかみ、夜があけやらぬまで泣いた。
そんな時、
「すいません、その制服くれませんか」
と、初対面の人間に服を脱げと言ってきたのが、ジャージ姿のちびっこだった。ゆりかが座ったまま振り返ってきょとんとすると、
「あの、ごめん、なさい。死ぬ気に見えたんで、血で汚れたらもったいないなと思って。私の制服、せっかく今日入学式なのにお酒で汚れちゃって。替えもないから困ってるんです」
と丁寧に解説してきたので、ゆりかはぷっと吹き出した。今度はちびっこがきょとんとする番だった。
「あげたいところだけど、私のもすでに酒臭いの。おまけに真っ赤」

そうして暗闇の中、ガードレール越しに二人でバカみたいに笑い、同じクラスになることを願ったりした。そのささやかな望みは叶えられ、約三年間、飛び降りる気は起きなかった。

「空子…」

親友の名前が漏れた。自分の体から空子が漏れ出していくような気がして、ゆりかは逃がすものかと体をつかんだ。

「空子ああああああああああああああああああああく」

来春から県外へ進学し、夢をかなえにいく空子とは、どうしても別れは避けられなかった。それが、ただ一ヶ月早くなっただけのはずなのに、それなのに、なんで国中の山が活火山に変貌したような気分になるのか。

「バカ、なんでいなくなるのよ」

ゆりかは、自分が全くもって独りになったことに気づいた。一年の初め、野外活動の班決めの際、そこそこ仲良くなっていた近場の席の子たちに謝り、真っ先に空子の席へ向かった。近くにいたのが、陸と羽実のコンビだった。そのまま四人で仲良くやってきた。

最後に四人でカラオケ言って、涙流してずっと友達だよとか口約束して、それぞれ新しい高校生活を始めるはずだった。それがなんで、まだ進路も決まっていない内、独りでひざをかかえて叫んで泣いていなければならないのか。理解に苦しんだ。是非、頭のいい人に解説してもらいたかった。

シーン08　二人目（2）

解説してくれそうな心当たりに電話して、グチを聞かせた。
「それで、二人で助け合うとか言うんですよ。羽実のやつ、東京入試は前日入りするって前言ってたのに。ホテルに一緒に泊まるんですかね、バカだと思いません？」
こうして友人関係の悩み的なものを打ち明けている間、相手はほとんど黙っていた。しばらくして気づいたことだが、あいづちが極めて的確で、言いたいことをスムーズに吐き出すことができた。
「それは、自衛行動の一種かもしれない」
友人二人との決別となった本日の論争に対し、和久井は評価した。
「学校休んで朝八時からのワイドショー観たことある？　あれの類を面白く思えるのは、それらが自分とは無縁のドラマだと本気で思い込める人なんだ。ようは、ほとんどの人間だけど」
「だからほとんどの人は、ドラマに憧れながらも実際にドラマチックな出来事が起きるとそれを否定する、ですか」
「うん、やっぱ鋭いね。確かに死んだはずのクラスメイトが殺しにかかってくるなんてドラマ、いらないと思う人が多いんじゃないかな。その羽実チャンが陸チャンを抱きこんで長瀬さん一人を悪者にしたのも納得できる。正体不明の亡霊におびえるよりは、多少理屈に無理があっても“長瀬さん”という目に見える存在を悪にしたてあげたほうが気分が楽なんだろう」
「そんなことしても、何にも意味ないのに」
「意味のある行動なんて少ないよ。それにしても」
和久井は、感心するように言った。
「意外と言っては失礼だけど、そんなことがあったのに冷静なんだね。助かるよ」
ゆりかは、ひそかに照れた。つい先ほどまで独りでばかみたいに泣き叫んでいたところ、電話してじっくり話しを聞いてもらえてこ

そなのだ。少し迷ったが、
「話、聞いてくれたんで少し落ち着きました」
と正直に言うと、向こうもつまりつまり言った。
「よかった。いや、実を言うとさ。俺、長瀬さんに嫌われてるんじゃないかってずっと心配だったんだ。だから、こうして電話してくれて嬉しかった。いやホラ、一緒に事件の犯人を追うコンビとしてさ、仲良くしたほうがいいし」
しなくてもいい言い訳に、ゆりかは和んだ。別に嫌っていたわけでなく、男性全般が苦手なだけだが、はっきりと嫌われたくないとか言われると悪い気はしなかった。悪い気はしなかったが、かえって変な空気になってしまった。そもそも男の人に、自分から電話をかけたのは初めてだった。
「もしもし。変な空気になったから話し逸らすけど」
どうもこの人、恥ずかしいことを堂々と言うタイプのようでゆりかは顔が少し熱くなった。
「長瀬さん、今家にいる？　すぐ向かうから、住所を教えてほしい」
うってかわって、ひっ迫した感じになった。
「さっきの話、冗談じゃすまないことに気づいたんだ。残り三人の内、二人がずっと一緒にいると言ったんでしょ。あいつがそれを知ったら、一番狙いやすいのは」
「私、ですね」
「うん。本当はこうなる前にヤツの隠れ場所を見つけたかったけど、もはや多少受身でもまずは身を守ることが大前提だ。とにかくすぐ行くから、家から出ないでほしい」
通話後、すぐに住所をメールした。確かに今一人で出歩くのは危険だ。実の父親と赤の他人を焼き殺し、自ら亡霊となった女がいつ襲ってくるか判らない。一人でいるときに殺されてしまう。和久井を待つ間何をしてようかと考えるうち、親友一人との永遠の別れ、そして残された親友二人との決別が体を痛めつけていたのかドアにもたれたまま眠ってしまった。

またも昼間から眠るゆりかを起こしたのは、またもケイタイの振動だった。昨日までなら何も勘繰ることなくバカ話ができた相手だった。

「ゆりぃ、助けて、すぐ来てくれぇ」

今日決別したばかりの友人は、声を殺すように叫んだ。ゆりかにまとわりついていた眠気は速攻ふっとんだ。陸が本当にビビってるときのしゃべり方だった。羽実と一緒に行動すると言っていたこの子から救援要請ということは、羽実は近くにいないであろうことは推測できた。陸はなおもささやき叫んだ。

「羽実が、東京へ行っちゃったんだよ。入試は明日だけど、朝早いから前日入りするって。あたし駅までついていったんだけど、東京行きが全席指定だったから置いてかれちゃった。あたし一人になっちゃった。ゆり、ごめんからすぐ来てくれぇ」

「わかった、わかったから落ち着いて。今どこにいるのか言いなさいよ」

三年間苦楽をともにした親友の一人が、バカな子だったことが分かってしまったが、放ってはおけなかった。予想とは違うが、敵が陸と羽実を監視しており、一人になる隙を狙っている可能性だってないとはいえない。陸の取り乱し方からも楽観はできなかった。ゆりかは素早く立ち上がり、一階の様子をそっと伺った。パパはまだ帰ってきていない。恋人の気配は消えていた。安心して脱ぎ散らかしていたコートをはおり、待ってろと言われた家を飛び出した。

すっかり日が落ちて、冬の星座が夜空を彩っていた。親友の情けない声が聞こえた。

「ゆりぃ、今どこだろ？　とにかく逃げなくちゃって思って。ここどこだろ」

「バカっ、すぐに表通りに戻って。駅前なんでしょ、すぐガ〇トが見えるはずだから入りなさい。何も頼まないと怒られるから、ちゃんとドリンクバーを注文して待ってるのよ。すぐに行くから」

「う…。ヨーグルトサンデーは頼んじゃだめか？」

「いや、好きなもの頼んでいいから」
「お金あんまし無いけど」
「あーもう！　私がおごるから何でも好きなもの頼んでおとなしくしてなさいよ」
余程混乱しているのか、以前の関係に若干戻ったような気がしたが、今はそれを喜んでいる場合ではなさそうだった。それでも
「ありがと、ゆり。やっぱ大好きだ」
と言われると、返す言葉に詰まった。
とにかく、今から街の駅前まで行くのは一時間コースだ。一度電話を切ろうと、ケイタイを耳から離した。が、何か声が聞こえた気がしたので慌てて聞き取る。確かに聞こえる。しかしそれは、聞き慣れたハイボリュームではなかった。どちらかと言うと正反対の、不思議ちゃんみたいな人がバスの中でぶつぶつ言う独り言のようだった。
「陸、どうしたの？　早くガ○トに入りなさいよ」
嫌な予感がして、もう一度はっきりと指示をした。返事の代わりに聞こえてきたのは。
「…なんで、…ゆりと」
また、独り言だった。ゆりかは親友の名を叫び、意識をはっきりさせようとしたが効果無く、薬漬けになった人が口からもらすような声しかしなかった。
「高校も陸上したかった、のに、…痛いよ」
肩をたたかれ、知らないおっさんがいい笑顔で「ドッキリ大成功！」と言ってくれないかと思った。もちろん、その願いは叶えられず、ゆりかは離れた場所から助けを求める友人の悲痛なつぶやきを間近で聞くことしかできなかった。
「バカ！　もっと叫びなさい！　いつもの大声はどうしたのよ！」
もどかしいというレベルをはるかに超えていた。今すぐ陸の元へ駆けつけられるなら、片足くらい壊れてもいいと思った。しかし苦悶がすぐそばで聞こえても、すぐそばに行くのに一時間かかる事実

は変えられない。言葉を忘れてしまったかのようなうめきだけが聞こえる。
「返して、あたしの、…右足、」
「〜っ」
ゆりかはケイタイを壊しそうなほど握りしめた。
「だれか！　誰か来て！　助けて！」
駅前の通行人がゆりかの救援要請に気づいてくれるよう、叫び続けた。それしか、親友を助ける可能性を考えられなかった。誰からも返事がこないまま、通話終了を知らせる案内音が聞こえると、ゆりかはケイタイを握ったまま崩れた。もう少しで、テレビドラマのように通信の切れた電話に向かって叫びそうだった。
それでも、親友の死をたやすく受け入れるほどゆりかは人生経験豊富ではなかった。最後の可能性、すなわちゆりかの叫び声が周りの人間に伝わるのを恐れた犯人が急いで陸のケイタイを切り、とどめをさす前に現場から逃走し、今陸は息も絶え絶え苦しんではいるがまだ終わってはいないという状況を信じ、市内からこちらに向かっているはずの男に助けを求めた。かすれた声で現在地を尋ねると、ちょうど駅で乗り換えるところだと言った。
「それより、早く陸のところに行ってあげて下さい！」
詳しい説明を求める男に、駅から一番近いガ〇トの裏に急いでくださいとだけ付け加えると、和久井に趣旨は伝わったようだった。
「騒ぎは俺からも見えるよ。救急車はもう着いてるみたいだ」
ゆりかに実況するためにケイタイを持ったまま走っているのだろう、秀洋の息づかいが聞こえてきた。ゆりかも同じように駅へと急いだ。
「すいません！　何があったんですか」
と言う和久井の声が聞こえた。野次馬のひとりに状況説明を求めたのだろう。ゆりかは走りながら、そのレポートを待った。陸は、きっと生きてる。元気ではないと思うけど生きてる。そう、信じるしかなかった。そうでなければ…。

「長瀬さん、聞こえてる？」
ほどなくしてあった問いに、ゆりかが「はい」と答えると、さらに
「落ち着いて聞いてほしいけど、大丈夫？」
と、問いが続いた。足を停めると、短い間隔で吐き出される白い息が見えた。これ以上全力疾走するには、コートを脱ぎ捨てて、身軽になる必要がありそうだった。
「殺人事件、だそうだよ」
男の事務的な実況を聞き、ゆりかは自分の吐いた息がすぐに見えなくなるのを見た。
友人の死を電話連絡されるのは、ゆりかの１５年の人生で二回目だった。

シーン09　二人目（3）

ゆりかは、三年前と同じ場所で同じようにガードレールを乗り越えた。その行動がスムーズに行えたのは、三年間でそれなりに足が長くなったからだろう。同じように人工の崖のふちに座り込み、足をぷらぷらとさせた。

空子が死んだ。陸が死んだ。次は、羽実の死を電話で知らされるのだろうか。それとも、自分が先に殺されるのだろうか。どちらでもいいような気がした。三年前、痛いのとお酒の臭いがイヤで死のうとした。それが空子と出会ったおかげで三年間先延ばしになっていただけだった。今から家に帰っても、パパと恋人の視界に入らないように暮らす生活が続くのだろう。三年前と何も変わっていなかったことに気づいた。しかしゆりかには、それを悔しがる士気はなかった。

ゆりかは空子を待った。ガードレールの内側にゆりかを戻してくれる空子を待った。あの時は落ちよう落ちようと思って、落ちきれずに日が昇りかけて空子と逢えた。今日は朝になろうが、犬の散歩をさせられているおじさんに見られるだけだということは分かっていた。もう空子は来ないのだ。ゆりかはだらだらと立ち上がった。今強風が吹けば、あっさりと飛べるだろう。遺書などで最後の自己主張をしたい相手もいない。いじめを苦に自殺する人は、相手の名前など書いて復讐したりするのだろうが、ゆりかはパパに犯されたり無視されたりするので疲れましたなどと書かなければいけない。それがお茶の間に公表されるのは恥ずかしい。長年昼食以外はずっと自分で作っていたので、三日とろろおいしかったですとも書けない。

顔を上げて、お気に入りの夜景を眺める。ただの田舎町だった。ゆりかは体の重心を夜景側にずらした。数秒後には、十数メートル下のコンクリートに頭を打ち付ける予定だった。

それが中断されたのは、ゆりかの進行方向と逆方向に力がかかったためだった。自由だったはずの右腕が、男の手に引っ張られていた。

「危ないよ、長瀬さん」

和久井はそう言って、ゆりかをガードレールの内側に引き戻した。ゆりかはされるがまま、対向車線側に引っ張られていった。

「ダメだよ、女子がこんな夜中に一人で出歩いちゃ。家で待っててって言ったじゃん」

和久井は、ゆりかの腕をにぎる力を強くした。ゆりかは体を小さくよじり、痛みを訴えた。和久井は逆に絶対に離さないと主張するように左腕もぎゅっと掴んだ。二人の距離がさらに縮まった。

「困るよ、長瀬さん。俺が困るんだ。友達が減っちゃって辛いのはわかるけど、何も長瀬さんまで死ぬことないじゃんか。寂しいんだったら、俺が代わりに一緒にいるから。いやその、代わりっていうのは同じ役割をするって意味じゃなくてさ、その、俺が長瀬さんの死なない理由になるっていうかさ」

男は、ゆりかの目を凝視したり離したりを繰り返した。ゆりかは和久井の発言の意味を理解する前に、パパ以外の男性にこんなに触られたのは初めてだと思った。そして、理解した。この男子高校生は、ゆりかに死んでほしくないと思っている。先の言葉は異性への告白的なものと解釈してよさそうだった。こういう経験は過去にもあったが、速攻拒否しなかったのは初めてだった。どういう対応が正しいのかわからなかったので、和久井の目をのぞき込むようにして、

「今から、私の家来てくれますか。今日、親いるんで」

と提案してみた。両腕は握られたままだった。男は目が点になっていた。

「普通“親いないんで”じゃないの？」

「ウチの場合、そのほうが自由きくんです。今は」

ゆりかはニッと笑い、掴まれている腕を逆に引っ張るようにして

歩き出した。和久井の足も、それに合わせて進んだ。
たったこれだけのことで、殺人犯を追うために協力しあっているだけの男が、空子に代わる生きがいになるなんてことはありえなかった。ただ、飛び降りる気はなくなっていた。
ガレージにはすでにパパの車があった。さっきまで、時間なんて気にする感じではなかったので、日付がかわりかけているのに驚いた。経験上、この時間はすでに恋人にあてがった部屋でしっぽりしているはずだった。
「“おじゃまします”とかも言わないで、そっと入ってきてくださいね」
ゆりかが自分の唇に指を当てると、和久井は黙ってうなずいた。
靴を持って二階の安全圏に案内し、戸を閉めると、
「さっぱりした部屋だね」
と、微妙に気のきかない感想を述べてきた。
「あ、このでかい鏡は女子っぽいね」
ゆりかは無言でコートをハンガーにかけた。場を和ませているつもりかもしれないが、ガキっぽくてムードがないと思った。そういうところは、パパは徹底していた。ゆりかがシャワーに行っている隙に、脱衣所に着替えを指定して置いておく人でもあったが。
なんにせよ入浴は必要だった。真冬とはいえかなり走り回ったりしたので、下着まで汗ばんでいた。
「先、シャワー行ってきます」
そう宣言して部屋を出ようとすると、
「風呂はダメだよ」
と呼び止められた。意外すぎるその反応に振り返ると、和久井は筆記用具やらプリントやらを引っさげていたカバンから取り出していた。
「今からお風呂でゆったりすると、確実に眠くなるからね。朝の出かけ前にしなさい」

そう言いながら、テキパキとプリントをゆりかの机に準備し、椅子を引いた。そして手招きしながら、
「さあ、座って。今夜は寝かさないよ」
と言った。ゆりかは頭の上にクエスチョンマークを浮かべる感じだった。そういう小芝居が好きな人なのかなとか考えていると、
「長瀬さん。まさか、明日が盟帝学園の入試だってことマジで忘れているんじゃないだろうね」
と言われた。
完全に忘れていた。ここ数週間、受験勉強はおろか学校にもろくに行っていなかった。というか、ついさっきまで自分の未来を努力して切り開くことを放棄しようとしていたところだった。ゆりかのボケた表情から察したのか、秀洋は大きく息をはいた。
「ほんと、見た目に反してたいした天然さんだよ。そうだと思って来たんだからいいけど。勉強って継続してないと思った以上にできないからね。一晩でカンだけは取り戻しておいたほうがいい」
そう言いながら、ゆりかの椅子をてのひらで叩いて、着席を促した。
「…今日は、最初からそのつもりで来てくれたんですか」
「そうだよ。普通なら勝負の前日は早めに寝るのが定石だけど、ブランクを埋めるためあえて徹夜を提案するよ。長瀬さんの先輩になりたいから」
持っていた着替えが足元に落ちた。顔が真っ赤になっているのが自分で分かった。ひとり頭の中で暴走した、思春期全開の脳みそが恥ずかしすぎた。ごまかすようにして、うながされるまま机に向かった。そして入試対策問題集をにらみつけ、久しぶりにして中学最後の闘いを始めた。和久井の言うとおり、覚えているはずのことを思い出すのに時間がかかった。
朝が迫ってきたので勉強を打ち切り、ゆりかはあらためてシャワーを済ませ、面接向けの格好づくりをした。目のクマはどうしようもなかったが、以前和久井にさせられた格好と似ていた。“その格

好のほうが似合うよ”とか言われるのを予想しながら部屋に戻ったが、そうは言われなかった。徹夜にずっと付き合ってくれた先輩は、ゆりかの机の隅に突っ伏し、寝息をたてていた。お礼とお昼くらいに家から出てほしい旨をメモ書きし、秀洋のカバンに置いた。振り返ってもう一度寝顔を確認し、小さくお礼の言葉をつぶやいてみた。返事がなかったので、文字とか言葉だけでなくて行動で感謝の気持ちを表したほうがよいかもと思い立ち、無防備な男の頬に顔を近づけた。近づくにつれ、自分の顔が上気し、徹夜の成果がすべて蒸発していきそうだったので急いで離れた。パパと恋人が起きている気配はなかった。

受験会場は、色とりどりの制服であふれていた。周り全員頭がよさそうに見えるという話は聞くが、自分みたいに徹夜したバカは何人くらいいるのかなと考えた。恐らくかなり少数派だろう。眠気との闘いが半分くらい占めたが、かえって解けるものと解からないものが判別しやすく、わりきって闘うことができた。

なんとか午前の四教科を耐え切り、ゆりかは用意していたてのひらサイズのおむすびをさっと口に放りこみ、後は少しでも体力回復に努めようと机につっぷすつもりだった。それを阻止してきたのは、試験カントクの手伝いをしていた在校生だった。その女子生徒は盟帝学園の入試会場で盟帝学園の制服を着ていたため、上級生だとわかったが、街中で遇ったら小学生と間違えそうだった。その子は、もはや半分閉じているゆりかの眼をかわいくキッとにらみつけ、

「やっと、逢えたです」

と言った。ゆりかは状況が理解できず、小さな上級生の大きな目を見つめかえした。それがどういう意図として伝わったのかゆりかには分からなかったが、大きな目が潤み始めた。

「ヒデ君、ずっと一緒にいるですか」

ヒデ君？　とオウム返しする程、ゆりかはボケてはいなかった。このちびっこが初対面でないことも思い出した。ゆりかが初めて秀洋に会ったとき、彼の足にくっついていた小動物だ。ゆりかが現れ

てから、全然相手してくれないとか言いたいのだろう。あの日以降、ゆりかがほとんど受験勉強できなかったように、和久井も亡霊の捜査に時間をとられてデートとかどころではなかったのは想像に難くない。ただ、ずっと一緒にいるというのは心外だった。つい数時間前まで、一晩ずっと一緒にいたのは確かだが、他には身代わりに焼かれた人のお母さんに話しを聞くのに同行しただけだ。誤解されたままもイヤなので、

「あれ以降二回は会いましたが、ずっと一緒なんてことはありません」

と正直に答えた。小動物は多少興奮していたが、ゆりかが適当なでまかせを言っているのではないと判断し、解答を冷静に受け止めているようだった。だから、その反応はかえってゆりかを驚かせた。

「…それが本当なら、ヒデ君はこの三週間、どこにいたんでしょうか」

「え？」

「ヒデ君は、あなたが来た次の日から、学校に一度も来てないです。家にも帰ってないです」

先輩は、まるい目を少し細めて、

「残り、国語と面接、頑張ってくださいです」

と言い、手を振り振り教室から出て行った。ゆりかは小さく手を振り返した。予想外の情報に眠気がとんだので、午後の闘いもなんとかなりそうだった。

シーン10　電話3

彼は今回の件に対して、随所が綻んでいるのを自分で感じていた。このままでは、彼自身がお縄につくのは明らかであった。それ自体は彼にとって大した不都合ではないが、彼女のお願いが叶えられなくなることは大きな問題点であった。どんなに治安当局を甘く見ても、もう二人分のチャンスは貰えない。残り二人はまとめて片付ける必要があり、その為には大幅な軌道修正が必要だと思われた。

彼は、電話を持つ手が汗ばんでいるのに気づいた。しかし彼女は、そんなことは一切気にしていないふうなテンションであった。

「陸って女はね、元凶なんだよ。よくないことが起こるのは分かってた。でも断ってキレてきたらイヤだから、私はうなずいたんだよ。それが始まりだった。だからある意味、陸さえいなかったらってのはあるんだ。でもやっぱり、陸が死んだからって、羽実と長瀬を許してもいいのかって言ったら、それは違うんだよ。羽実は私の存在を否定する最悪女だし、長瀬は、一番許せない。私になりすまして評判を貶める人非人なんだよ」

彼女が声を詰まらせるのは珍しくなかった。彼は、その隙に彼女を呼んだ。四年前以前から使っている呼び名だった。

小さく、反応が返ってきた。

「…ごめん、呼んだだけ」

彼がそう言うと、えへへ、と笑うのが聞こえた。

「あ、お父さん帰ってきたよ」

いつもの自由な話題転換。それは、明らかに彼に向けられていた。

「足音でわかるよ、今日もお酒をいっぱい飲んだんだ。職業安定所って、夕方までしかやってないから、それからずっとだ。もう、四年になるんだね。お父さんが信頼していた和久井工業から仕事をもらえなくなって、就職活動をするようになって。お母さんが私たちの為に文字通り命がけで貯めてくれたお金を、ああして使ってるん

だ」

情けないうめき声が自分の口から漏れたのが分かった。彼女が、四年ぶりに伝えたかったのはこれだったのだと、身に刻んだ。てのひらだけでなく、全身からイヤな汗が吹き出てきた。そのわり、体の震えは止まらなかった。彼女は、一体彼に何を望んでいるのか。イシャ料を払うよう父に頼め？　取引を再開するよう父に頼め？　まさか、謝罪？　父があのとき、どんな苦渋を重ねて和田工務店を切ったのか、彼はよく知っていた。盟帝学園の受験を勧めてきたのも父だった。子ども関連であっても、和田との接点を無くすべきだという意識だろうが、彼自身への配慮もあったと思っている。彼は父の提案を受け入れたが、それが彼女にとってどういう感情を持つことになる出来事であるかを全く想像できない程、現国の成績は悪くないつもりだった。

彼は彼女の言葉を待った。彼女が電話から離れたのには気づいていた。父親の介抱に向かったのだろう。彼は冷たい汗にまみれた電話をタオルで拭き取り、ついでに自分の顔をぬぐった。時計を見ると、日付はとっくに変わっていた。

シーン11　三人目（1）

前日まで忘れておいてなんだが、人生の分岐点といえる第一志望校の受験をこなして余裕のできたゆりかは、しばらく振りに登校することにした。合否は数日後だが、とりあえずひと段落といったところだ。お別れの近いクラスの面々も見ておきたかった。しかし、久しぶりの三年C組は、中学なのに自由登校が採用されているようだった。無理もない。一ヶ月足らずの間に、クラスメイトが三人減ったのだ。しかも、未だ犯人は捕まっていない。人によっては一生を決めることになる大事な受験シーズンにそんな危険な場所にのこのこ通うことがはばかれるのだろう。実際はいずれも登下校とは関係ないところで死んでいるのだが、みんなの気持ちは分からなくもなかった。登校している少数のクラスメイトと適当にあいさつし、愛用の席に座ると、空子の机に花瓶が置かれているのが見えた。公立が本命の人らはここが勝負どころのようで、他のことには意識を向けない風だった。ゆりかは、頬杖をついて教師が黒板にチョークをぶつける音を聞くだけで、給食の時間まで過ごすことに成功した。

通常のように近所と机をくっつけようとしてもスカスカで寂しいので、最近はみんなで席をくっつけて食べるようだった。ゆりかもそれに混ざって昼食を楽しんでいたが、メール着信に気づいたので担任の視線を確認した。大抵の日はどこかのグループと談笑していたはずの担任は、教卓でうつむくように黙って食べていた。ふくよかだった顔は、青くしぼんでいた。ゆりかは安心してケイタイを確認した。差出人は、同じクラスの女子からだった。

『陸の第一志望の合格発表、今日決行します！　主賓は気の利いたコメントを考えておくように（笑）。放課後、私の家に即集合です』

宛先は、ゆりかの他二人にも送られていた。送信先のアドレスがまだ残っているかは知らない。ゆりかは黙ってケイタイを閉じ、同じく私立が第一志望のクラスメイトと談笑を再開した。もちろん、

公立組に気を使う内容に留めた。
終礼も清掃もいつの間にか終わった。
周りに適当にあいさつをしながら一人で目指す正門は、イヤになる程遠かった。だから、今唯一気の知れる男に
『時間空いたら、連絡ください』
というキャラ違いの甘えたメールを出してしまったのも仕方が無かった。自分のメールに照れる間もなく、足が止まった。
「長瀬さん、こんにちはです」
その人は、正門の影に隠れるようにして控えめに立っていた。小さい先輩は、制服のスカートを押さえ、
「受験、お疲れ様でした」
と、ぺこりと頭を下げた。
「あ、ありがとうございます。先輩も監督お疲れ様でした」
ゆりかもつられて倣った。盟帝学園はまだ終礼の時間ではないはずだった。先輩は時間をもらえないかとことわってきた。今のゆりかは地域のドブさらいとかに積極的に参加できるくらいの余裕はあったので、迷わず頷いた。なんとなく、駅のほうに歩いた。ゆりかの通学路とは逆方向だが、ゆりかにとって問題ではなかった。
「私、今日始めて仮病を使いました。ちょっとドキドキしたです」
ゆりかが当然抱くであろう疑問を先読みしたように、先輩は会話を切り出した。ドキドキしたですと言って頬に両手を当てる仕草がかわいかった。
「もちろん、こうして長瀬さんと話すのが目的でした」
「じゃあ、和久井さんは今日も学校に来てないんですね」
先輩は、うつむいて肯定した。その様子は、本当に彼氏を心配して行方を捜している彼女以外には見えなかった。
「初めてあなたを見たときは、学校まではわかりませんでした。その時、制服をしっかりチェックしておけばと後悔しているです」
ゆりかは自分の服装を見た。好きでも嫌いでもない、特徴の少ない紺色の制服だった。

「あなたが第一中学であることが分かって、私は最近よくニュースでやってる、連続殺人事件に初めて興味を持ったです。あなたを待っている間、大勢で下校するか車で迎えに来てもらっている人ばかりでした。こんな緊張感は、テレビからはあまり伝わりませんでした」

先輩が歩を止めたので、ゆりかはそれに倣った。小さい先輩はゆりかを見上げ、

「あなたは、一人でも心配なさそうに見えたです」

はっきりと、そう言った。ゆりかは何も答えず、ただ先輩をじっと見返した。先輩は、今のは余談ですと断った。

「私は、ヒデくんがいなくなったことと、あなたの学校で起きている連続殺人事件は関係があるかもしれないと考えたです」

「それって、私が連続殺人事件に関係しているって言いたいんですか」

ゆりかは、つい口調を荒げた。空子を殺したのはあんただなんていう人がいたら、たとえ冗談でも許せない。先輩は、そうは言わなかった。

「ヒデくんは、第一の事件の日から一度も登校してません。ただ、一日を除いてです」

わかるですか？　先輩は、ゆりかを確かめた。

「あなたが、盟帝に現れた日です。ヒデくんはあの日も欠席でした。だから私、校内放送でヒデくんが呼ばれたとき、ぎょっとしたです。すぐにヒデくんのクラスに駆け込んだですが、クラスの人たちも先生も意味がわからないと言ったです。それで直接確かめに行ったら、ヒデくんとあなたが密室で二人きりだったというわけです。その時私に芽生えた感情は、主旨とは関係ないので省略するです」

ゆりかは先輩の話しを聞きながら、不思議な感覚がした。話しの内容のわりに、敵意を感じないのだ。

「その時の私は、ずっと学校に来てないとみせかけて、こっそり生徒指導室で他の女と一緒にいるヒデくんの行動をウワキと見なした

です。ヒデくんは否定したですが、私は納得しなくて、次ウワキしたらどうするかを約束させたです」
穏やかでない男女の約束は、ゆりかの人生経験ではまだ理解できない領域だった。先輩は、ゆりかが話しを聞いていることを確認してから続けた。
「でも、今なら分かるです。あの日あなたは、ヒデくんに会いに来た。ヒデくんは、あなたに会うために学校へこっそり来た。でも、待ち合わせなら、わざわざ放送で呼び出すなんてするわけないです。多分ヒデくんは、あなたが来るとにらんで、どこかに隠れてたんです。つまり、あなたとヒデくんは味方同士ではないです」
ゆりかのツリ目が一瞬、先輩に負けないくらい丸くなった。ゆりかは、待ち伏せする先輩を見たとき、昼ドラ展開に応じるつもりだった。しかし登場した本妻は、親友を次々と失って独りになったゆりかの唯一の依りどころとなったはずの和久井を、味方でないとおっしゃる。あえて目を背けていた自分のコンプレックス部分の拡大写真を、メールで送りつけられた気分だった。先輩はゆりかの反応を待っているようだったが、ゆりかは考えがまとまらず、恋敵であるはずだった人を見つめた。
その時間に亀裂を入れたのは、ゆりかのケイタイの着信音だった。先輩が「どうぞ、出てくださいです」という仕草をした。電話先の同級生は、ゆりかがメールに無反応だったことは全く触れなかった。
「どうしたのゆりちゃん、とっくに学校終わったでしょ。早くきてよ。あと、ゆりちゃんだけなんだよ」
「ゴメン、ちょっと遅れそうなのよ。詳しくは後で説明するけど。…ていうか羽実、今日ひょっとしておばさんいないの？」
「…今朝、新しい男と出て行った。荷物から判断すると、三泊四日」
羽実はそこまでしか言わなかったが、わかったら早く来いという意味が含まれていることはすぐにわかった。ゆりかが待たせ人をちらりと見ると、少し離れたところに立ってこちらを見ていた。興味のない振りをして聞き耳をたてている人より、余程好感が持てる待

ちかただった。この人は、多分ウソを言っていない。いや、本当はもう分かっていた。ただ、認めるのがあまりに辛かったから、知らないカンジでいただけだったのだ。ゆりかは意を決して電話に戻った。今日で、終わらせる。

「羽実、ジツを言うとさ。あんたのとこ、今からカレシと行こうとしてたのよ。一緒に行って、驚かしてやろうと思ってたんだけど、私遅れるし、羽実暇そうだからカレシを先に行かすわ」

「ゆりちゃん、カレシって…男？」

ゆりかを知る人なら、当然の疑問だった。ゆりかが笑って肯定すると、羽実は安心したように承諾した。余程、一人は恐怖らしかった。

ゆりかがケイタイを切る動作を終えると、待ち人がててて寄ってきた。

「続きです。だから私は、長瀬さんにお願いしにきたです。あなたは、ヒデくんに二回会ったと言ったです。あなたは、多分ヒデくんがいつもどこにいるのかを知らないです。つまり、会うときは連絡をとると思うです。次、そういうことがあったら、私にすぐ教えてほしいです」

お願いですと、ぺこりと下げた先輩は、つむじの形までかわいらしかった。撫でていいかなと思ったとき、再びゆりかのケイタイが鳴った。ディスプレイを確認したゆりかは、よすぎるタイミングに声を立てて笑った。なるほど、ちょうど盟帝学園の終礼が終わる時間帯だ。先輩は、後輩の突然の奇行におそるおそるという風に顔を上げた。

「あはは、すみません。ちょっと電話でますんで」

電話の相手は、先ほどゆりかが寂しさを紛らわそうとメールを送った、唯一気の知れる男だった。ゆりかは、寂しがっている残り一人の親友のところへ先に行ってほしいと伝えた。相手は、承諾した。

用件を伝えて通話を切ったゆりかは、再びててて寄ってきた先輩に笑いかけた。

「先輩のお願いですけど、さっそくＯＫです」
どういうことですかと説明を求める先輩に
「その代わり、電話かけるの手伝ってください」
と言うと、余計わからない表情をして首を傾げたので、ゆりかは先輩をぎゅっとするのを我慢するのに苦労した。

シーン12　三人目（2）

今鳴らしている電話は、一連の事件を終わらせるのには必須ではなかった。犯人も現在位置もほぼ分かっている。それを警察に知らせればよいだけなのだ。そうしないのは、ゆりかが知りたかったからだ。

電話は、つながった。

あれからまだ三十分。電話の相手はゆりかの依頼通り、羽実を護衛する為に急いで駅へ向かっている最中のはずだった。ゆりかは側で控えている先輩に右手を上げた。先輩は、打ち合わせ通り、自分のケイタイを鳴らした。

「どうした、長瀬さん？　さすがにまだ着かないよ。急ぐから、羽実チャンにはもう少し頑張るように言っておいてよ」

聞こえてきた。羽実が使っている二種類の着信音の内、未登録番号からかかってきた時の音だった。発信元は、先輩のケイタイであることを疑う余地はない。相手もその着信音に何かを感じたのか、言葉を切った。

やがて羽実の着信音が聞こえなくなった。ゆりかの隣で先輩が、ケイタイをしまった。留守電に切り替わったようだ。ゆりかの作戦は成功した。和久井はウソを言っている。予想通り、和久井の現在地は駅でも街でもない。ゆりかは、電話の向こうの現実を想像し、唾を飲み込んだ。

「…和久井さん、羽実の様子は、どうです？」

「……」

和久井は少し間を置いて、

「やるね、長瀬さん」

と言った。姿の見えない犯人の顔が、ゆがむのがわかった。

「やっぱり、女子は怖いわ。真顔でウソがつける」

そう言われて、ゆりかは先輩の顔を見た。約束通り、おとなしく

してくれている。
「された質問に答えないといけないね」
犯人はゆりかの知らない声で笑った。
「羽実チャンは、さっきまで半分に切ったムカデのように動いてたんだが、今は静かに寝ているよ。大変だったよ。恐怖させて苦しませるのが俺の目的なのに、すっかり信用されてたからね。ゆりちゃんを大切にしてあげてくださいとか言われたし。長瀬さん、よほど信頼されてたんだね」
「…陸を殺したのも、あなたなんですか」
「そうだよ」
笑いついで、というふうだった。
そして…。
「空子チャンを殺したのも、俺だよ」
あの時、すでにそうだったのだ。
変な格好を指定されて、それに従って、すねたふりして、一緒に歩いて。共通の目的でもって、気持ちも共有した気分になって。マックおごってもらうことになって。あの時、少し嬉しかった。あの時、並んで電車を待っていた男の手で。
「なんでこんなことするのよ！」
道端で泣き叫ぶ女子中学生に、通行人らの注目が少しの間集まった。その人たちの内、女子中学生を泣かせた電話の相手が、最近この地域を縮こまらせている連続殺人犯だと推測した人はおそらくいない。
「ゆりちゃんの復讐に決まっているだろう」
ゆりかの叫びに呼応するように、犯人も口調を荒げた。
ゆりかは自分を聖人君主などとは思っていない。世間の評価は知らないが、どちらかというと生きる意味もろくにわかっていないダメな人だと思っている。たまに飛び降りたくなるし。だから、自分につもりがなくてもつい人を傷つけてきた可能性、そしてその人に復讐される可能性も考えたことはある。ただ、それと今回の事件と

はどうしても結びつかなかった。
事の発端は、火事で死んだハズのクラスメイトからの電話だった。それを知る和久井秀洋という男子が現れて、犯人を一緒に探すことになった。身代わりに焼き殺されたという斎木愛花さんのお母さんに会った。その後、空子が死んで、陸が死んで、羽実が死んだ。そして今、ゆりかは犯人と電話をしている。犯人は当然、亡霊などではなかった。ただ、状況は分かっても意味は分からなかった。しかしそれは、冗舌な犯人がこれから教えてくれるようだった。
「昔、クラスの連中からひどく扱われていた人が、大人になってから、復讐の為に同窓会の幹事をかってでたという事件って知ってる？」
「…海外文学か何かのお話しですか」
「現代日本のノンフィクションだよ。その人は、同窓会で用意する料理に毒を盛って、元クラスメイトらを皆殺しにしようとしたんだ。もっとも準備段階でその人の母親が通報し、未遂に終わったらしいけど」
犯人はその事件が今回の件に関係していると言いたげだった。
「その事件の一番人間らしい部分は、加害者共のうち、誰もその人が幹事をかってでたことに疑問を持たずに任せたということだ。つまりそのカス共は、その人を傷つけていたことにすら気づいていなかったんだ」
お前らと一緒だと、犯人は言った。
ゆりかはそれを真摯に受け止めた。何度考えても、殺されるほど傷つけた記憶はよみがえらなかったが、人にされたことをどう思うかは人それぞれだという常識を最大レベルで拡大解釈したとき、ようやく心当りがひとつだけ浮かんだ。それが、その人とのほぼ唯一の接点だった。
もしそれが、空子が殺された理由だとしたら。
もしそれが、陸が殺された理由だとしたら。
もしそれが、羽実が殺された理由だとしたら。

もしそれが、私の殺される理由だとしたら。
否定を期待して、犯人に問いかけた。
「殺したい程傷つけられたって、和田ちゃんがそう言ったんですか。そしてそれを」
「今さら本名で呼んでも遅いんだよ！　おまえらは面白半分だったんだろうがなあ、ゆりちゃんは死ぬほど傷ついたんだよ」
ゆりかが質問を言い切る前に、全肯定してきた。しかし、和田さゆりを本名以外で呼んだ記憶はない。まともに会話をしたのは、あの時だけだった。
みんなが話しやすい環境を作ろうとする学校側の配慮か教育研究の実験か知らないが、入学早々、五月に実施される野外実習の班決めをさせられたのだ。クラス全員で、五～六人のグループに分けさせられた。ゆりかは、そこそこ話すようになっていた席の近い女子二人に謝り、空子の席へ急いだ。可愛すぎる笑顔で迎えてきた空子の後ろの席で同じく二人でいたのが、陸と羽実だった。それで班は四人になった。そして、一人自分の席でどんと構えている女子に陸が話しかけたのだ。
「ね、あたしらの班に入らない、和田さん」
早く五人そろえて安心したいと思ったのだろう。こうして、五人班が結成された。やがて他のグループも特に大きな混乱なく、決まっていった。まだ慣れないので微妙に気を遣い合い、役職も大変そうなのをあえて選ぶなどし、班長や料理長など一通り決まった。余った時間で雑談をしていると、呼び名の話題になった。陸も羽実も下の名で呼び捨てがいいと主張した。空子も同様だった。ゆりかは、自分もそうしてもらおうと思ったが、
「ゆりちゃんはゆりちゃんだよねー、ゆりちゃん」
そう言って、空子が抱きついてきたのでそうなった。
「和田さんって下の名前なんだっけっと、さゆりか」
役職の名簿をちら見して陸が自己解決した。
「和田さんも、ゆりちゃん？」

「んー、ていうか和田ちゃんって感じかも」
「和田ちゃんか。うん、しっくりきた。私とかぶっても悪いしね」
その時、ふくよかな担任が自分の話しを静聴するように指示してきたので、みんな雑談を止めた。野外実習の当日、和田さゆりは病欠した。
ゆりかは、そういう過去を持っていた。
「まさか、まさか」
四人の出会った日とはいえ、思い出と呼ぶことすら微妙なただの日常だ。大きな感情の変化は誰にも見受けられない。ゆりかの常識では、気を遣う遣わない以前のただの雑談だ。
「まさか、それ、なの？」
どんだけセンサイなのよ…。全身脱力したゆりかは、膝から崩れた。握っていたケイタイもアスファルトに転がった。
「やっと、少しは理解できたか？　あんたらの日常で、あんたらの常識で、傷ついて、死ぬほど苦しんでいる子がいるんだよ。そういうことを分からせられたって点では、あんたを殺さないでおいてよかった。ゆりちゃんの悲劇を二度と繰り返させてはいけない。あんたを使って、世間の自己中どもに自分たちの愚かさをわからせてやる」
地面に転がったケイタイからまだ何か聞こえていたが、ゆりかの耳には入っていなかった。それを拾いあげたのはゆりかではなかった。
「…もしもし、ヒデくんなんですよね」
小さい先輩の妙に落ち着いた感じに安心して、ゆりかは道端で目を閉じた。

シーン13　電話4

彼女の提案で、彼女の色々な台詞をケイタイで録音した。
「えへへ、アフレコみたいで楽しかった」
電話を途中で放って二時間以上一方的に席を外しても、相手は通話を切ることなく普通に待っていて自分の話しは確実に伝わることに対して、何の疑問も抱いていないようだった。録音作業に満足すると、彼女はさらに語り始めた。彼は、彼女の望むようにした。
「私、色々と考えが浮かんでるんだよ。あと記憶も。六歳の時、お父さんとお母さんに手をひかれて遊園地にいったこと。どれに乗りたい？　好きなものに乗っていいんだよって言われたから、私、ゴリラが動くやつに乗ったの。百円入れて、三分くらい動くやつ。動いてたゴリラが止まったら、終わり。大人になった今なら分かるんだけど、ゴリラが止まったらぴょんと降りて、次はあれ乗るーとか言って走っていくのが正しい子どもなんだよね。でも私は、ゴリラにしがみついたままだった。お父さん、笑って百円を追加してくれた。私は、再起動したゴリラを運転した。多分、楽しかった。ゴリラが六回目に停止したとき、お父さんは私を抱きかかえてゴリラから引きはがした。私は、そのときほんの少しも抵抗しなかった。私は抱かれたまま、お父さんの提案で回転木馬に乗った。お母さんは、外で手を振って待っているパターンだった。私が手を振ると、お母さんは笑った。私は、ゴリラに乗りたかった」
内容はともかく、こうして彼女が自分語りをしてくれたことが嬉しかった。
ずっと、彼女と一緒にいたい。いつの間にかそう思うようになっていた。気づけば、彼女の望みは出来る限り叶えていた。
「今のは、私が幼稚園の話しなんだよ。小学校に入って、ヒデくんに出会ってからはヒデくんとの記憶しかないんだよ。私立を受験するからって、学校にあまり来なくなるまでの五年間、ずっと一緒だ

ったよね。ブログを教えてくれたよね。カタチにすれば、どんな願いも叶うって、教えてくれたよね。だから私は何度も書いた。ヒデくんからアイデアをもらって、二人だけのブログに何人もの殺人計画を書き続けた。でも、願いは一度も叶わなかった」

彼は、少しの間目を閉じた。一緒にいた五年間も、一緒にいなかった四年間も、彼女は全く変わっていない。彼女が変わったほうがいいのかそれともこのままでいいのか、彼にはわからなかった。

しかし今、彼女は変わろうとしている。四年ぶりに電話をかけてきたのだって、何度も迷ったあげくの決断だろう。先も彼女のアイデアで亡霊の声の録音を行った。そうやって頑張る彼女を大切にしたいと思った。

「ヒデくんのくれるアイデアは、いつも私のことを考えてくれてた。そして、絶対に私自身が行動しないと、うまくいかないようにしてあった」

だからね。彼女の消えそうな声は、楽しそうだった。

「今度こそ、私もやってやろうと思ったの。ヒデくんがいなくなってからの四年間、私、何もできなかった。やっぱり、ヒデくんがいてくれなくちゃダメだって思った。だから、今回は、今度は絶対、私も行動するつもりだったんだよ」

少し、空気が変わった。昔からそうして遊んでたように、妄想の殺人計画を語り終え、あとは彼女がそのネタを自分たちしか見ないブログに書きおこすだけだと思っていた彼は、全身から尋常でなく冷たい汗が出てきた。すぐにも寝付ける格好の上から、学校指定のコートをかぶせて、彼は深夜の街を走った。

普通に、ありえない。

彼女の言葉を聞き漏らすまいと、左手には手袋をはめずにケイタイを握り締め、自転車を走らせた。

「お父さんは、先に逝ってもらったんだ。酔っ払いだったから簡単だったよ。殺ってやる、って決心するまでのほうが大変だった。キッカケをものにするのは大事だね。私にとってのキッカケは、やっ

ぱりヒデくんの考えてくれる作戦なんだよ。やっぱり私には、ヒデくんが必要なんだよ」
声はますますよわよわしくなり、途切れ途切れなのに、どこか誇らしげだった。悪質な冗談であってほしいが、そうではないことは彼が一番よくわかっていた。
彼女は、自分の考えでしか動かない。
だから彼は走った。電話でいくら説得しても、彼女は揺らがない。
「あのね、あのね。私、包丁で背中を刺したの。自分の。でね、その包丁を死んだお父さんに持ってもらったの。順手で。どうかな、上手くいけば、警察の人も私がお父さんに殺されたように見えないかな」
リスカ少女のような演技ではないことは、彼にしか伝わらないだろう。彼女の生命を救うことを第一に考えれば、今からでも緊急車両に頼るのが一番よいと分かっていた。しかし、彼はそうしなかった。彼女がそれを望んでいないのが分かっていたからだった。
「あのね…。あとね。買い置きの灯油を、ありったけ部屋にこぼしたんだよ。重かったけど、このまま火をつけておけば、うまくいけば、私だって特定できなくなるかも？」
誇らしげに、消えそうに言った。彼は、彼女が喜びそうな返事をした。彼女は喜んだ。
「これで、なんとかヒデくんの立ててくれた作戦通りに進むよね。私の亡霊が、あいつらを皆殺しにするんだよね。私をゆりちゃんって呼ばなかったこと、影で激しくブス…略してゲキブって呼んでたこと、後悔させてやれるんだよね」
彼は、ほとんど聞こえてなくなった彼女の言葉を聞き取るために、自転車を停めた。
ありえない。
彼はそう思ったが、彼女がどちらかといえば“普通”でない部分が多い人であることも九年前から知っていた。
「まかせて、ゆりちゃん」

「まかせるよ、ヒデくん。えへへ」
数時間、つながり続けていた電話が切れた。電話をとったことに、後悔はなかった。
これから遠くない未来、事業の失敗を皮切りに人生に絶望した中年男性が、ひとり娘と無理心中を図ったというニュースが一時的にメディアを賑わすだろう。それまでに彼がしなければならないことは、確実に姿をくらませる潜伏先を探し出すことだった。彼は自転車を急がせた。彼の望みは、彼女の望みを叶えることだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9783r/

ゲキブの亡霊

2011年10月11日08時06分発行